

暗記，暗唱から会話へ 一例文集をベースとした， ロシア語によるスキット活動の実践

山本有希*

From Memorization and Recitation to Conversation
-Project of Skit Activities in Russian Based on Example Sentences-

YAMAMOTO Yuki*

This paper is a report on a classroom project that incorporated skit activities. The purpose of the skit activity was to improve students' ability to listen to and speak Russian and to motivate them to learn Russian. After the project, I analyzed the questionnaires of the learners and found that the effects were generally in line with my aims.

キーワード: ロシア語, スキット, グループ活動

1. はじめに

本稿は，例文集をベースとしたスキット(寸劇)の制作を通じて，既習事項の振り返りおよび活用に取り組んだ授業実践の報告である。

対象としたのは，本校国際ビジネス学科 2 年生のロシア語を選択している学生 11 名で，ロシア語学習歴は 1 年半程度である。スキットの制作は，令和 3 年 12 月の 5 回の授業（環日本海諸国語Ⅲ B およびⅣ B）のそれぞれ後半を充てた。

スキット制作のベースとした例文集(以下，Q&A 集)は，著者が教科書の例文から抽出して作成した教材である。スキットの制作においては，適度に助言を与えながら見守る役割として，専攻科生によるティーチング・アシスタント(Teaching Assistant, 以下 T A)を配置した。

2. スキット活動導入の背景

2.1 ロシア語のカリキュラムについて

国際ビジネス学科には，第 2 外国語として環日本海諸国語(ロシア語，中国語，韓国語)を 5 年間学習

する特色があり，1 年次からロシア語，中国語，韓国語のうち 1 言語を選択している。環日本海諸国語の単位数と学習時間数を以下表 1 に示す。

表 1 国際ビジネス学科における環日本海諸国語の単位数及び学習時間⁽¹⁾

学年	単位数	学習時間
1 年	4 単位	120 時間
2 年	4 単位	120 時間
3 年	6 単位	180 時間
4 年	6 単位	120 時間
5 年	4 単位	60 時間

2.2 使用教科書について

対象学生は 1 年次で教科書「Поехали! 1-1」⁽²⁾，2 年次では「Поехали! 1-2」⁽³⁾を用いて学習している。この 2 冊の教科書は，ヨーロッパ言語共通参照枠(以下 CEFR)における A1-A2 基準⁽⁴⁾を満たすように制作されている。

CEFR における習熟度基準⁽⁵⁾によれば，A1 レベルでは「日常生活や社会的文化領域のごく限られた場面で初歩的なやりとりをすることができる」とされ，必要な学習時間は 100-120 学習時間(ロシアでは 1 学習時間 45 分)⁽⁶⁾，A2 レベルでは「日常生活や文化，学問領域の限られた場面で最低限必

* 一般教養科ロシア語

e-mail: yamamoto@nc-toyama.ac.jp

要なやりとりをすることができる」とされ、必要な学習時間は A1 レベルの学習時間+180-200 学習時間⁷⁾とされている。

2.3 ロシア語学習の状況

著者は 1, 2 年生のロシア語科目を担当している。表 1 に示した通り、国際ビジネス学科では 2 年次までに A2 レベルに到達するために必要な学習時間が設定されており、例年 2 年次までに A2 レベルの学習内容の大半を終える。今回対象となった学生についても、2 年次で「Поехали! 1-2」を修了予定である。

しかし、ロシア文字の習得や文法の学習に多くの時間を割く必要があり、CEFR に提示されている目安通りには進まないのが実状である。特に文法の学習では、学習者に知識を与えて覚えさせることに追われ、学習事項を用いて「やりとりをする」段階まで到達することが難しい、というのが著者の実感である。

更に深刻な問題としては、ロシア語を選択した学生達が「ロシア語は難しい」「ロシア語を話せる気がしない」等と感じ、自発的な学習に向かわないことが挙げられる。

2.4 スキット活動に用いた教材―Q&A集

Q&A集は「Поехали! 1-1」及び「Поехали! 1-2」の各単元に掲載されている例文を抽出して適当なアレンジを加え、1 課毎に 10 問程度を目安として作成した一問一答式の例文集である。ペアワークによる対話練習やディクテーション、口述試験の課題として活用している。

これは「覚える」ことをサポートする教材であるが、学習者任せではその効果を十分に得ることは難しく、教師が「使う」環境を与え、自律的に「覚える」作業へと導くことが重要である。そこで Q&A集を有効活用するための方法として、スキット活動の導入に思い至った。

3. スキット活動のねらいと想定した効果

3.1 活動のねらい

スキット活動を取り入れたのは、国際ビジネス

学科 2 年生の 11 名であり、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、令和 2 年の入学直後から 6 月中旬までオンライン授業を受けたクラスである。初修外国語の学習をオンラインで始めることになったため、大きく学習進度が遅れてしまった。したがって、通常授業再開後は予定されていた学習内容を大幅に見直し、文法項目の学習時間を確保したために、結果的に音読や会話といった口頭練習の時間を削ることになった。そのため、「音読する」「聞き取る」「話す」という練習が十分にできず、「読めば分かるけれど聞き取れない」あるいは「和訳はできるけれども音読できない」という傾向があり、学生自身もそれを感じているクラスであった。

そのためスキット活動導入に際しては、学生が仲間と協力してロシア語の作品を完成させたという達成感や自信を得ること、そしてこれまで学習してきた表現を用いれば、多くの情報を伝えられると気づくことが重要であると考えた。そこで、スキット作成に際しては、学習していない表現を追加することはせず、既習事項のまとめりである Q&A集と教科書のみを用いることにした。

3.2 想定した効果

スキット導入により得られると想定した効果を以下表 2 に示す。

表 2 スキット導入により想定した効果

<p><文法学習面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・名詞の語尾変化(造格変化)の定着 ・既習事項の活用 <p><口述能力面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「話す」「聞く」能力の向上 <p><グループ活動による分野横断的能力⁽⁸⁾></p> <ul style="list-style-type: none"> ・仲間と協力して目的を達成する力 ・主体的に活動に取り組む力
--

3.3 専攻科生によるTAの活用

スキット活動を円滑に進めるため、TAを導入することにし、本校専攻科国際ビジネス学専攻の 2 年生 3 名に依頼した。TAは本科国際ビジネス学科でロシア語を選択しており、学生にとっては学科の先輩にあたる。

TAには、学生の観察者、助言者および軌道修正者という役割を依頼した。グループ活動においては、リーダーが生まれると同時に、リーダーについていくだけの者、いわゆるフリーライダーも生まれることがある。TAがグループ活動を見守ることで、緊張感と責任感が生まれることを期待した。一方、2年生がTAに接することで、進路選択の上で刺激を受けてほしいというねらいもあった。

4. スキット制作計画

スキット制作に際して学生に与えた指示を以下に記す。

(1) スキット活動についての説明

- ・課題として評価に参入すること
- ・自己評価及び他者評価を行うこと
- ・スキット活動の意味が、既習事項の活用にあることを理解すること

(2) 学生に対する指示

- ・Q&A集及び教科書の既習表現のみを用いる
- ・翻訳アプリ等を使用しない
- ・TAに文法を尋ねてはいけない
- ・発表者個々の発話量のバランスをとる
- ・発表に際しては、声の大きさや聞き取りやすさ、アイコンタクトやジェスチャーなどに留意し、現実の会話らしい雰囲気を出すよう努める

(3) TAに対する指示

- ・観察者として軌道修正に徹するが、仲裁・助言は行ってもよい

(4) スキットのテーマと分量

作成時間が限られていたため、教師側でテーマを指定し、スキットは3分以上5分以内で発表できる分量とした。

(5) スキット活動のスケジュール

環日本海諸国語ⅢBおよびⅣBの前半は通常の授業を実施し、後半をスキット活動に充てた。当初12/6～12/15の4回の授業を予定していたが、作業進行が遅れたため、12/20を追加した。

(6) グループ分けとTAの配置

著者が学生11名を無作為に4人グループ2班と

3人グループ1班に分け、TAを各グループに1名ずつ配置した。



図1 スキット制作中の様子

表3 スキットのテーマ

<ul style="list-style-type: none"> ・自分の友人に新しい友人を紹介する ・互いに自己紹介(立場・身分・趣味等)をする ・料理とレストランを紹介する(所在地、値段、好き嫌い、来店経験、交通手段等) ・モスクワ、ペテルブルグ、ウラジオストクの三都市から舞台を選ぶ ・新しい友人を食事に誘い、実際に行く約束をして別れる(日時、待ち合わせ場所)
--

表4 スキット活動スケジュール

日時	活動内容(40分間)	TA
第1回 (12/6)	<ul style="list-style-type: none"> ・スキット学習の説明 ・班分け、制作開始 ・活動振り返り 	参加
第2回 (12/8)	<ul style="list-style-type: none"> ・スキット制作 ・活動振り返り 	参加
第3回 (12/13)	<ul style="list-style-type: none"> ・スキット制作 ・原稿提出(添削後返却) ・活動振り返り 	参加
第4回 (12/15)	<ul style="list-style-type: none"> ・スキット制作 ・原稿提出(添削後返却) ・活動振り返り 	不参加
第5回 (12/20)	<ul style="list-style-type: none"> ・スキット実演練習 ・スキット発表 ・アンケート採取 	参加



図2 スキット実演練習中の様子

5. アンケート結果の分析

最終日に学生アンケートを実施した。以下にアンケート結果の分析を記す。

5.1 スキットにより向上を感じた能力

表5 スキットにより向上を感じた能力について

<p>Q1 このスキットで向上したと思う項目を そう思う順に3つ選んでください。 <選択肢></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ロシア語を読む力 ・ロシア語を話す力 ・ロシア語を書く力 ・ロシア語を聞く力 ・仲間と協力する力(※グラフでは「協力性」) ・ロシア語に積極的に取り組もうという姿勢(※グラフでは「積極性」) ・グループ活動を通じて主体的に活動しようという姿勢(※グラフでは「主体性」)
--

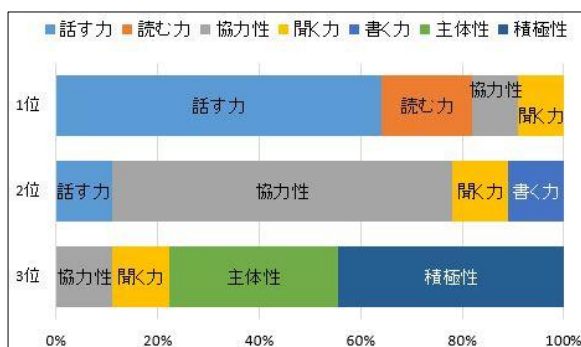


図3 アンケートQ1

向上したと感じる能力の上位3項目を尋ねた問いでは、11人中8人が「ロシア語を話す力」を第1位とした。これはねらい通りであり、著者としては安堵した。

Q&A集をベースとしているため、四技能のう

ち「読む」「書く」を選んだ学生が比較的に少ないのは当然の結果と考えられ、学生がスキット活動の意図を理解し、実行していたことが明らかになった。

また、6名が「仲間と協力する力」を第2位に挙げていることは非常に興味深い。

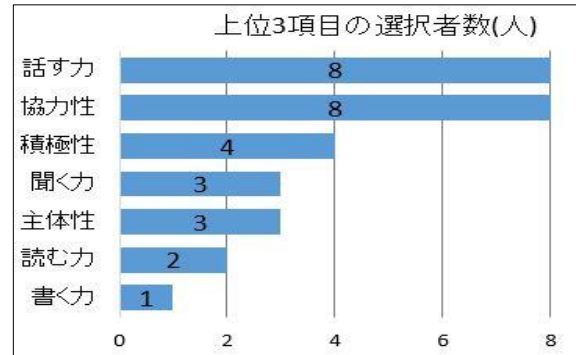


図4 アンケートQ1上位3項目の選択者数

図4は、向上したと感じる能力について、それぞれの能力を選んだ学生が何人いたのかを示すグラフであるが、8名が「仲間と協力する力」を挙げている。授業においてペアワークは頻繁に実施しているが、グループ活動は今回が初めての試みであった。仲間との協力なくしては課題を達成できないということを、学生が強く意識していたことがわかる。メンバーが協力して取り組んだ結果、一人で暗唱や暗記に取り組むよりも大きな成果を得ることができた。言語活動が他者との関わりの中で発達していくことを、改めて実感させられた。

5.2 四技能の向上に対する自己評価

(1) 「読む力」

「とても向上した」と「向上した」を合わせると学生の9割が向上したと考えている。Q&A集には対訳の記載があり、改めて和訳する必要がないため、ここで上げられている「読む力」は「音読する力」を指していると考えられる。実際にテキスト作成の際、Q&A集の表現を音読しようとしたもののスムーズに読めないという学生が散見された。学生が、日常的に訓練を続けていないと音読する能力が定着しないという気づきを得たのであれば幸いである。

表6 アンケートQ2～Q5

Q2 このスキットを通じてロシア語を読む力の向上度を5段階で示してください。
Q3 このスキットを通じてロシア語を書く力の向上度を5段階で示してください。
Q4 このスキットを通じてロシア語を話す力の向上度を5段階で示してください。
Q5 このスキットを通じてロシア語を聞く力の向上度を5段階で示してください。

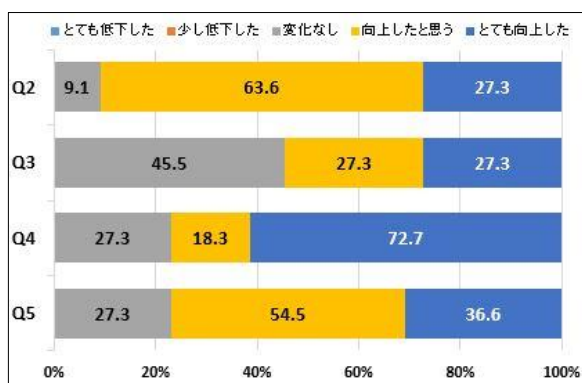


図5 アンケートQ2～Q5

(2) 「書く力」

四技能の中では「変化なし」と答えた回答者が最も多かった。これは前出5.1で述べた理由と同様で、Q&A集を用いたため、新しい文章を作文する必要がなかったからと考えている。

(3) 「話す力」

「とても向上した」が8名、「向上した」が2名、「変化なし」が1名であり、ねらい通りの結果を得ることができた。

(4) 「聞く力」

「とても向上した」が4名、「向上した」が6名、「変化なし」1名であった。「話す」と「聞く」が噛み合って会話が成り立つことは自明である。重要なのは、学生がスキットにより会話能力の向上を感じ、スキットは会話能力を向上させるトレーニング手法であると認識して取り組むことである。

5.3 グループ活動に対する評価

「Q6：グループ全体の出来について良かったと思う点」については、アイコンタクトやジェスチャーを挙げた回答が多かった。また、「会話の流れ」や「間(ま)」といった現実の会話の雰囲気を出せ

たことを評価する回答も多く見られた。教師の指示を理解し、実践した発表であったことが分かる。

「Q7：グループ全体の出来について改善が必要と思う点」については、「シナリオをもっと凝ったものにできればよかった」という回答が多かった。他のグループの発表と比較して、自分達ももう少し良いスキットが作成できたのではないかとという反省に加え、一層の向上を目指す要望と考えられる。

「Q8：自分(自身)の発表について良かったと思う点」については、自分自身のセリフについて、「流暢に話せた」、「ジェスチャーをつけた」、「感情を表現できた」といった記述が多かった。特に流暢さと感情表現については、授業でテキストを音読する際の留意事項として、常に学生に指導していた点であり、学生自身の気づきを促せたことの意義は大きい。学生たちは「セリフの意味や場の雰囲気きちんとして伝える」ことを意識して取り組んだと感じており、成果があったと考える。

一方で今回のスキット活動は、著者がこれまで実施してきた音読練習が、「文字が正しく発音できている」か否かの確認で終わっていたのではないかと反省する機会となり、著者にとっても実り多い試みとなった。

「Q9：自分の発表について改善が必要と思う点」については、セリフの発音、抑揚、暗記等、練習不足に関する記述が多かった。後期中間試験と冬休みの間の、比較的余裕がある時期に実施したものの、学生の出足の鈍さが響いたのではないかと考えている。

5.4 その他の学生コメント

スキット活動にまた取り組みたいかを尋ねたところ、9割が「ぜひ取り組みたい」または「取り組んでも良い」という肯定的な回答だったが、「絶対に取り組みたくない」という学生もいた。口頭発表に強い抵抗を感じる学生は一定数存在すると考えられるため、実施の際に配慮やサポートが重要である。

また、TAの存在に関しても高評価だった。年齢

の差もあってか、学生は緊張したようだが、TAは気さくに対応し、良い雰囲気で作業を進められたようである

6. 今後の課題

今回のスキット活動では、様々な知見を得ることができたが、同時に反省するべき点も多かった。

第一点は学生に明確な評価基準を示すことができなかったことである。テーマや発表時の留意点については細かく規定して注意を与えたものの、スキット活動という課題の全体像について、評価基準を示して説明することができなかった。次の機会では突発的に実施するのではなく、年間の授業プログラムの中にしっかりと位置付けた上で取り組みたい。

第二点は、スキットの制作と発表に重点を置いたため、作成されたテキストの分析がなされていないことである。Q&A集にある表現がどのように用いられ、教科書の例文がどれだけ取り入れられているのかという点や、添削時に見られた誤りの傾向分析については、その分析方法から検討することが必要であり、別の機会を設けたい。

第三点は、学生がロシア語能力の向上や達成感を実感することを主たる目的としたため、客観的な能力測定ができていないことである。能力の向上の客観的測定については、その方法を検討し、学生にフィードバックしていくことを今後の課題である。

7. まとめ

ロシア語を「話す」「聞く」能力とロシア語学習へのモチベーションの向上を目的として、授業にスキット活動を取り入れた。アンケート結果の分析から、学生達はロシア語能力の向上を実感し、スキット活動を肯定的にとらえていることが分かった。また、スキット制作を通じて、仲間と協力しながら主体的に活動することを体験し、達成感を得ることができた。また、他のグループの発表を見て、

「もっと頑張りたい」という意欲を示すなど、想定した以上の効果が見られた。

今後はシラバスを再検討して、スキット活動の時間を確保し、どの学年でも安定して実践できるよう努めたいと考えている。

8. 謝辞

国際ビジネス学専攻2年小熊優歌さん、清水梓さん、西川若奈さんには、専攻科の授業や特別研究で多忙な中、後輩のために快く協力してくれたことに深く感謝する。今回のスキット活動が、時間が制限される中でも順調に進められたのは、TAのサポートのおかげである。

また、Moananu Charlton Bill 先生には英文のチェックをしていただいた。ここにお名前を挙げて謝意を示す。

9. 脚注及び引用文献

(1) 4,5年時には学修単位科目があるため、単位数と学習時間数が一致していない。また、表には示していないが、ロシアに短期留学する制度として「環日本海諸国異文化実習」(3週間4単位)というプログラムもある。

(2) Станислав Чернышов, Алла Чернышова, «Поехали! Русский язык для взрослых. Начальный курс: Часть 1.1», СПб., «Златоуст», 2020

(3) Станислав Чернышов, Алла Чернышова, «Поехали! Русский язык для взрослых. Начальный курс: Часть 1.2», СПб., «Златоуст», 2020

(4) 前掲書2, P.168

(5) 横井幸子, 「プロジェクト概要 社会に開かれたロシア語教育の確立 ―言語学習における主体性, 対話性, そして多言語性―」『特集 平成30年度 文部科学省 グローバル化に対応した外国語教育推進事業 事業成果報告』, 『ロシア語教育研究』第10号, 2019年, P.70, 表5

(6) 前掲書5, 同表

(7) 前掲書5, 同表

(8) 独立行政法人国立高等専門学校機構, 「モデルコアカリキュラム―ガイドライン―」2017年, P.4